

---

# Silent Majority

龍奈 身形

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S i l e n t M a j o r i t y

### 【Nコード】

N 2 9 4 5 Z

### 【作者名】

龍奈 身形

### 【あらすじ】

魔法使いには恐れるものがある。一つ目に、自分より強い魔法使い。二つ目に人外。そして殺し屋。

この話は、一人の殺し屋に目を向けた話である。

1 ; August 22 殺し屋の仕事後

そこは何の変哲のないマンションの一室だった。

時はすでに深夜0時を回っている。そこに二人若い男女の姿があった。

男のほうは、壁際にある椅子に腰かけていている。

女のほうは、壁にもたれかかっていた。

ここまでではなにもおかしくはない。普通だ。

この二人が深夜にこの部屋にいるのも、この二人の関係によって理由は異なるとしても、おかしい話ではない。これもまた普通。

しかし何かがおかしい。言葉で聴くだけなら、文字を読むだけなら、なにもおかしいことはない。が、

実際この部屋に訪れ、見た者は、間違いなく口をそろえてこう言うだろう。

異常だ。

異常だった。何が異常かと問われるなら、まず一番の異常は、女の腹部に、ナイフが刺さっていることだ。？それはただの殺人現場異常なことは何一つないじゃないかって？

そうではない。確かにナイフは刺さっていた。ただし、数十本。

数十本のナイフが女の腹を抉り、貫き、そして確実に女の命を射殺<sup>ころ</sup>していた。

刺口からは夥しい量の血液が流れ、床を真っ赤に塗りたくる。

そして次の異常は、男だ。彼の手には、女に刺さっているナイフと同じ形のナイフが握られている。それは男がこの女を殺したという紛れもない真実を表している。

そして男の目の前には、何かが無造作に転がっていた。

色は赤。形はトマトをぐちゃぐちゃに潰したかのように、とても

強い咽かえるような臭い。これはまるで

「腐ったイチゴだな」

口を開いた。誰が？この部屋には二人しかいない。

部屋の隅で丸椅子に座り、片手にナイフを握る男と、壁にもたれ、腹から血を流している女。そして女はすでに生きてはいない。

男は、道徳心というものがわからない。幼少の時、彼は初めて殺しをした。殺しといてもそんな大層なものではない。猫を一匹殺した、それだけのことだ。それだけのことだけど、彼は実感した。これが生きていくことなんだと。生きていくことの証明は死があることで生がある。言ってしまうえば死がなければ、生きていくことにはならない。もっとも彼が1年前に手合わせした吸血鬼は不老不死を有していたが・・・。

この考えを男は今でも変えていない。男にとって殺しとは、生を否定するものではなく、肯定するもの。女は殺されたのではなく、生かされたのだ。

すこしまわりくどくなってしまうたが、結論から言うと、男の言う「腐ったイチゴ」は紛れもなく女の臓器だった。心臓があること自体異常だが、あと一つ以上があるとすればそれは男がそれらを見ても、何もアクションを起こさないことだった。

いくら殺す・・・否、生かすことに躊躇しないからといって、話は別だ。不快なものを見たら、気分が悪くなる、「これは「腐ったイチゴ」を見た、色が赤い、臭い、気持ち悪い」ではなく、「腐ったイチゴを見た」 「気持ち悪い」という、例えるなら反射、さらにわかりやすく言うなら人間的本能なのだ。それに耐えられるのは、何十年も経験を重ねているベタラン医師ぐらいだと思ったのだが・・・。

まあここでは、男は「腐ったイチゴ」を幾度となく見てきたベテランの殺し屋だと理解することと妥協するとしよう。

コンコン

突然の来訪者。

こんな夜中に何の用だろうか。普通はそう思うのだが、その男はやはり異常だった。

「次来たやつが魔法使いだったら殺そう」

座っていた丸椅子からゆっくり立ち上がると、男は一步、二歩と息を潜め、ドアの前に立つ。一度深呼吸をして、左手に持つナイフに力を込める。

そして勢いよく、ドアを開けると同時に左手のナイフを突き出した

時は8月、真夏の昼下がり。場所はとある地下カジノ。そこに小太りの男の姿があった。

男の名はミルチ。年は三十代半ばぐらいに見える。少し垂れた目に低い身長から、一見おっとりとした、言い方を変えれば間抜けなようにも見えるが、れっきとした魔法使いである。

ミルチはスーツで身を包んでいて、本来ならこんな物騒な場所にいるだけで違和感を感じるのだが、なぜここにいるかというところ、それは彼が魔法使いであることに所以する。

魔法使いとは、名の通り魔法を使う者のことである。

現実では魔法というだけで異常なようにもみられるが、魔法は魔力さえあれば誰でも使える代物で、裏社会では割と多くの人間が使用している。

ただしだれでも使えるといっても、唐突に魔法が使えるようになり、それを自由に使いこなせるようになるわけではない。それには、悪魔との契約が必要だ。

悪魔を呼び出すには、今自分の持っている魔力の半分を対価にする必要がある。だから魔力のないものには、絶対に魔法は使えない。ミルチは重い足取りで、カジノの中心にある半円で真っ赤なカウンターに向かった。

「何か御用でございますか。お客様」

店員がこれでもかというほどの笑顔で声をかける。

「ええ、ちょっと。わたしは山羊野さんに招待されたものですが」

ミルチが招待状を差し出すと、店員はやっときたかと安堵の表情を

浮かべ、こつ返した。

「ミルチ様ですね。お待ちしておりました。ではこちらに・・・」

すると店員はボタンのようなものを押す。

どうやらそれがスイッチになっていたらしく店員の近くの床がパカッと開き、そこには階段が見えた。どうやらさらに地下へとつながっているようだ。

「暗いので足元にはお気を付けください。しばらく進むと扉が見えて参ります。そこで山羊野様がお待ちになっています。では、行ってらっしゃいませ」

店員は、懇切丁寧に説明をし、階段に進むようにミルチに促した。

「感謝するよ」

小太りの魔法使いは感謝の言葉を述べ、階段へと足を運んだ

ミルチがカジノに着く数時間前 表通り、F銀行にて

「おまえらあ。殺されたくなかったら金を出せえええ！」

若い男が声を荒げる。

銀行の中には、覆面を被った男女十数人、銀行員、そして一般人数人。

そして謎の覆面集団は銃を片手に、他の人たちは両手を上に挙げている。

説明するほど難解な場面ではないが、わかりやすく言うなら銀行強盗。さらに付け加えるなら、覆面集団が強盗するほうで、銀行側が強盗されるほうだ。

この集団はこころ辺の地域では割と名が知れていて、先週も三件強盗があつた。もちろんこの集団の仕業だ。

強盗が多発しているのに、警備を怠つたこの銀行にも非があるだろ。主犯格の男、ロッダはそう考えた。

「有り金は全部入れるよ。後警察に電話したらただじゃおかねえからな。お金だけに」

「・・・ロッダ、全然うまくねエから」

仲間の一人、ミサが突っ込む。

「で、できました」

銀行員の一人が、金を詰め込んだ袋をロッダに渡す。

「おう。どれどれ。ああ！？足りねえよ！オイオイこんなんで俺らを返す気かよ。前の銀行はこれの二倍くらい出してくれたぜ」

「え、いやもうなくて」

「ねえじゃねーよ。ほら、わかってんだろ？」

ロッダは銃を突きつける。すると銀行員はあわてて金庫へ向かう。

「ったくよあ。最近の若いやつは」



「おい、おっさん」

「あ？」

「お前のことだそこのハゲ」

「んだとてめ・・・え？」

ロツダは啞然とした。いやロツダだけではなく、その仲間も、客も、銀行員も、この場にいるすべての人間が強面の男、ロツダの前に存在する「それ」に目を向けた。

仮に銀行強盗の現場に居合わせた勇敢な男がいたとしよう。ありえることだ。

そしてその男無謀にも強盗犯に向かって行ったとしよう。まあ、あり得るかもしれない。

しかしそれが年端もいかない少年だとしたら？  
そして「それ」はまさしく少年であった。

しばらくの沈黙の後、少年が口を開いた。

「金を返せ」

ロツダは呆気にとられていた。目の前の少年が無謀にも集団に立ち向かったことにはなく、自分より明らかに年下の少年が、ロツダに対して見下したような目で、しかも偉そうにしゃべってきたからだ。

「聞いてんのかゴリラ野郎」

ロツダの怒りパラメーターは着実に上昇していったが、こんな子



ロツダは自らの剛腕をその少年に振るった。  
誰もが最悪の事態を想定した。  
が、

「な・・・に」

ロツダが渾身の力で放ったパンチは少年の小さな手のひらで受け止められていたなんて、だれが想像しただろうか。

「この俺様に拳を入れようとしては評価する。

だが言ってしまうと、それだけの事だ」

少年は、拳を受け止めているほうの逆の手、つまり左手でロツダの手首のあたりに横一文字に爪で痕をつける。  
そして

「もげる」

「え？」

その刹那、ロツダの右腕手首から先がなくなった。いや、言い方を変えると最初からそこには何も存在しなかったように、右手が在った空間にはきれいさっぱり何もなかった。

ロツダは呆然とする。ロツダだけでなくそこにいた全員がその場に立ち尽くすしかなかった。

「探し物はこれか？」

そして少年の手には右手が握られている。  
大柄の男ロツダは何があったかを悟った。



それは持ち主に金を返せという意味ではなく、おれの標的ターゲットに手を出すなという意味。つまり少年も「盗賊」だった。

しかし小さな英雄にそれを咎めない。・・・咎められない。

情報屋にはめられたかと思ったがこれはこれで満足だ。久しぶりに魔法を行使できた。お金も手に入ったし。少年は一人で納得する。

小さな魔法使いこと「盗み屋クレアス」は、銀行を後にした。

日光がキラキラと照りつけ、人々が人込みを避け涼しげな日陰を探している中、とあるマンションの一室の隅のほうに設けられた席で、一人煙草を吸う情報屋兼探偵の姿がそこにあつた。

彼の名は榊原つがはらの來姫。女々しい名前だが、彼とつくからにはもちろん性別は男だ。

しかし、中性的な顔立ちと、その名前から声を聞くまで女だと信じていた者も多い。もつとも、本人はそれをひどく気にしているようだ。

來姫は現在とあるクレーマーの対応に追われている。

クレーマーの名はクレアスと言う。

『おい、情報屋。』

「なんだい？」

『なんだいじゃねーよ。魔眼を持った金髪吸血鬼がいるって聞いたから、銀行に行ってみたらわけのわからん銀行強盗がきて、そいつらに魔法使っちゃまったじゃなねーか。どうしてくれんだよ。しかもあいつらは銃を持ってて本当に殺されかけたんだぞ』

めんどくさい奴だな、と心で來姫は毒を吐いた。

「確かに吸血鬼はいたよ。だけど君が銀行に入る5分前ほど前に出て行ってしまったよ。一足遅かったね。それと君が魔法を人前で使ってしまったことに関してだけど、そもそも君の魔法は光を放つたり、オーラをまったりする類のものではないだろう。しかも強盗犯の銃はモデルガンだよ。っていうか君も気付いてたんだろ？」

仮に本物だとしても君ほどの魔法使いなら容易に退けられたはずだ。もっとも、君がこの500年間を無駄に生きていかなかったらの話だけだ」

『……』

クレアスは黙り込む。

「まさか君、それを理由にして金を渡さない気ではないよね」

『……』

「凶星か。本来なら今の金額の倍はとってるんだよ？ だけど君が常連ということと、金欠だからということとで今の金額にしているんだ。それに、前回の金もまだ払ってないし。」

君は「盗み屋」だろ？ まさか銀行行ってまさか金を一銭も盗んでないわけじゃないだろう」

『……のくせに……』

「？」

『來姬ちゃんのくせに生意気だ』

「だからその名で呼ぶなと」

じんこん

ドアがノックされた。

「客が来たから切るぞ……っってもう切れてるよ」

來姫はため息をつく。

「あ、どうぞ入って」

突然の来訪者に、來姫は部屋に入るよう促した。

「失礼する」

「おじゃましまーす!」

入ってきたのは、コートを着た中年の男と、随分と派手な格好をした女だった。

「欲しい情報があるのだが」

「へえ、どんな」

「魔眼の吸血鬼についてだ」

オマエラモカ

情報屋は先ほどより大きくため息をついたのだった。



魔術協会本部にて

真っ黒なコート。

真っ黒なサングラス。

真っ黒な靴。

真っ黒な帽子。

ただでさえ異質な教会内の中でも極めて異質、自らな体を真っ黒で包んだ女の姿があった。

彼女はつい先ほど、協会側から吸血鬼狩りの任を請け負った。なんでも日本ではあの魔眼吸血鬼が現われているらしい。真意は定かではないのだが、行ってみる価値はある。彼女には日本に行くもう一つの理由があった。

あの人は今元気だろうか

もう一つの理由とは、日本には彼女のかつての師がいるからだ。研修生時代は本当にお世話になっていたのだが、彼は突然に魔術協会を脱会してしまった。理由はわからないが、別れのあいさつもいけずじまいだったので本当にいい機会だった。

わが師。今すぐあなたのもとに参ります。

黒づくめの魔法使いランコは、遠い異郷の地にいる小太りの魔法使いのことを頭に想像しながら協会を後にした。

数分前 協会内にて

「やあ 来てくれたようだねランコに、ヨーツンハイム」

協会内のある部屋に三人の魔法使いの姿があった。

ランコと呼ばれた女は、全身を黒で染め上げたような服装をしている。気だるそうにしているが、根はまじめな魔法使い。

そしてヨーツンハイムとは見るからに魔法をつかいそうな格好をしている男だ。

それは、本当に魔法使いの衣装かもしれないし、日本でいうコスプレの一種かもしれない。もちろんその真相を知る者はいない。協会内でも屈指の魔法使いだが、何を考えているかわからないうえ、任務を途中で放棄したり、仲間を殺したりと問題行動が多く、本来ならとつくの昔に解雇されているはずの人間なのだが、それでもこの組織に居続けられるということはこの男の殺しの腕がそれほど優れていることの証明だ。

そして最後、魔術協会総主教クロヌリアだ。この男が魔法の元祖とされている。滅多に顔を出すことなくランコは実際に姿を見たのが初めてだった。

説明しておく、ランコとヨーツンハイムはこの男に呼び出されるこの部屋にいる。

そしてこの男から直接呼び出されたということは相当大変なことが起こっているに違いない、ランコはそう考えた。

「こんにちわ・・・いえはじめましてでしたね。クロヌリア卿。」

「クロヌリアの旦那直々に話とは、余程のことがあったと見える。だがあえて聞かないことにしよう。なぜなら・・・」

ヨーツンハイムは大きく息を吸うと、それを全部吐き出すかのようにつに叫んだ。

「それを話すためにクロヌリアの旦那は俺たちを呼んだからだ！」

「何を当たり前のことを言っているんだ貴様は」

ランコはヨーツンハイムを睨んだ。

「おー怖い怖い」

「まあその通りだよヨーツンハイム。君たち二人を呼んだのは、君たちにちよつと仕事を頼まれてもらいたくてね」

「仕事……ですか？」

「ああ。実は魔眼の吸血鬼についてなんだが」

・・・

部屋が凍りついた

「あの……なあ旦那。あれは架空の生物なんだぜ？魔眼に吸血鬼なんて鬼に金棒じゃないか。さすがにいるかないかわからない生き物の存在なんて信じられないぜ」

さすがのヨーツンハイムも引いているようだった。

魔眼の吸血鬼とは魔法使いたちの間で噂されている都市伝説のよ  
うなものだ。いつからそんなうわさ話が流れたかはわからないが、  
信憑性は低い。

「それなんだが、これはとある情報屋から仕入れたものなんだが

見てくれ」

二人に一枚の写真が手渡された。

「なるほど。これは確かに魔眼持ちの吸血鬼です」

「ヤバイヤバイ。なんかテンションあがってきた」

「場所は日本。今すぐ向かってくれるかね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2945z/>

---

Silent Majority

2011年12月24日10時45分発行